

# 論文内容の要旨

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻社会経営科学プログラム  
2016年度入学  
(学生番号) 161-700021-6

ふりがな はやし たか し  
(氏名) 林 隆 司

## 1. 論文題目

社会的無視・忘却における要援護性に関する研究

## 2. 論文要旨

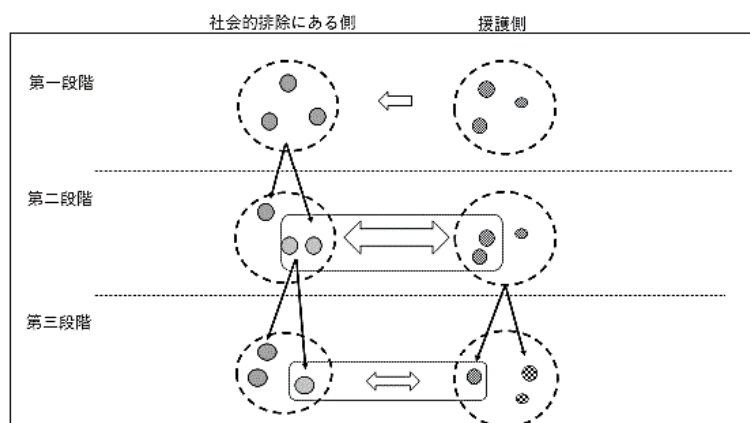
社会的排除の状態にある人びとの増加が深刻化し、社会的包摂のため様々な社会的援護が提起されるが、社会的援護は包摂の目的に反しかれらを再び排除もする。それは社会的援護が援護と同時に生み出す「社会的無視・排除」が、相互作用としてかれらを無視・忘却するからで、同時に社会的援護における制度・活動でも無視・忘却が生じる。

本論は、社会的排除および制度と人びとの相互作用に関する先行研究を検討し、社会的援護による働きかけと同時に、社会的無視・忘却の生成される過程とその要因と構成を明らかにすることを目的とした。社会的無視・忘却の知見は、3章で社会的排除に対する社会的援護の相互作用と、4章で社会的排除の更なる進行が当事者の人格的排除を伴って当事者の存在を社会的に否定する影響を明らかにした。これは、社会的排除に関する知見を更新するものである。そして5章および6章で、社会的無視・忘却が典型的にみられる災害の被災者へのインタビュー調査の結果によって論証した。結論として、社会的無視・忘却が社会的援護への信頼を失わせ、および社会的排除が深刻な社会的分断をもたらす影響を提示した。

序論は、本論の主題を扱う現状認識と社会背景を概観したうえで、「介護殺人のあと命を自ら断った男性」の事件から「社会的無視・忘却」の所在を提示した。そして、今日増加する男性介護者の社会的孤立や介護殺人・未遂事件を例に、社会的援護の制度と活動が有効でないことを示し、本論の意義を明らかにした。この底流にある社会的排除を「ミイラ化したホームレス男性の遺体が発見された事件」を事例にしてその広がりを示し、社会的排除が生じる社会背景に対する現状認識を整理した。次に、本論を考察する視点として、制度・政策および社会変

動などマクロな視点、当事者の状況と支援活動などミクロな視点および両者の相互作用に注目する点を中間領域として確認した。また主題が生成される関連性から、社会的援護に対する本論の立場を整理した。次に、社会的無視・忘却の概念整理の準備として、社会的排除や社会的援護の対象などの先行研究レビューを行った。以上を踏まえ、本論の目的と方法および構成、倫理的手続を示した。

1章では社会的無視・忘却の概念と構成を明らかにした。まず社会的無視・忘却の定義を示し、社会的無視・忘却の生成される過程として、社会的援護と当事者との相互作用をあげた。社会的排除にある人びとに対し、社会的援護の制度や活動が包摂を試みても再び要援護状態に陥る状況が繰り返されることで、当事者が無視され、さらに忘却される。この過程は同時に、社会的援護の活動や制度にも分断を生み、社会的無視・忘却する側を生むのである（下図）。



3

次に、社会的無視・忘却を生起・促進させる要因を明らかにする予備的考察として、この現象の背景を考察するため、厚生省の研究会報告書を批判的に検討した。ここから個別的な要因への還元、社会的なカテゴライズ、制度化による援護の「定型化」等を提示した。これを促進するように社会的関心の変動するために、社会的無視から社会的忘却へ状況が深刻化することを提起した。

2章は、社会的無視・忘却の要因と構成を考察し、その構造を明らかにした。まず、社会的排除や社会的援護および社会学の先行研究を分析し、社会的無視・忘却の要因を導き出した。また、先行研究では、社会的援護を中立的にしか扱わず分析が不十分であることを示した。社会的援護は制度および共同体や市民の活動から構成されているが、普遍主義にもとづく反面選別性という矛盾がある。これらは相互に役割を補完し、組織と個別では異なる相互関係を社会的排除やその当事者ととりもつ。両者は日常性を共有するか否かで包摂にも排除にも機能する。とくに後者は、当事者の多様性から共有が拒否され、社会的援護が選別

的に機能する結果、社会的無視・忘却を生み出す。本論はこれを“包摂的排除”と呼び、論証するために社会学における社会的相互作用やラベリングなどの理論を用いた。したがって、無視される側と無視する側それぞれから、そのメカニズムをとらえる必要がある。

これによって、差別や偏見など社会的なカテゴライズが生み出され、当事者の個別的経験としての社会的排除がかれらの人格的排除も意味するものでもあることを示した。本来セーフティネットとして機能すべき社会的援護が、社会的無視・忘却を生むことで社会的排除を再生産する。それにとどまらず、社会システムの存立を脅かしかねないのである。

3章は社会的無視・忘却が社会的排除の当事者を「無視される側」の変化としてどう機能するか、社会的排除への批判的検討を通して、従来の研究に対して拡張すべき課題提起を目的とした。先行研究では、社会的排除はその要因を分析したが、社会的援護との関連を検討せず、かつその深刻化する状態を明らかにしていない。しかし、岩田正美によるケーススタディや、社会的排除に関連する著作によって、個別的な影響が素描されていることを明らかにした。本論は社会的無視・忘却の概念を用いることで、社会的排除の個別的な影響、および社会的排除の深刻化した状況では人格的な排除から存在の忘却に至ることを示唆した。そして社会における分断を深刻化させ、社会的援護への信頼を失わせることにつながる、と展望する。以上を通して、社会的無視・忘却が、従来の社会的排除論に不可欠な課題を提示し、時間的経過を示すことで、将来の社会への影響を展望する独創性のあることを確認した。

4章は、3章で社会的排除において当事者が社会的に無視・忘却「される」問題性を明らかにしたことと対照的に、社会的相互作用やラベリング理論に関する先行研究との比較検討を通して、社会的無視・忘却をもたらす側を分析する視点をひらき、社会的排除の研究の多面性を明らかにすることを目的とした。

社会的援護の制度・活動は、社会的無視・忘却の要因として機能する上で、社会的排除にある人びととの日常性を共有しない。また、ラベリングによって無視・忘却を促すとともに、自らの援護の正当性をも相対化させている。その結果社会的援護は、当事者の信頼を損ない個別的で人格的排除をもたらすとともに、社会的排除からの回復ないし社会的包摂に対して逆機能を果たす。本論はこれを“援助の拒絶効果”と呼び、その構造を明らかにした。

5章は、理論的な整理と検討を踏まえた社会的無視・忘却の概念について、災害の被災者において典型的にみられることを論証した。まず被災者の経験に注目して考察する意義と妥当性を確かめた。次に災害や被災者の範囲を吟味し、社会的援護との関連を確認した。これを踏まえ、自然災害における社会的援護が時

間的経過とともに、被災者の社会生活で被る社会的排除の発生、被災者への社会的無視として当事者を社会的排除に至らせる過程を確かめた。以上を通して、理論としての社会的無視・忘却の概念と過程が、被災者が徐々に社会的無視・忘却の状況へ陥っていく過程として典型的に見出せるということを確認した。

6章は、5章における考察を踏まえて、阪神・淡路大震災（1995（平成7）年1月17日）により被災した住民へのインタビュー調査で得られた当事者の目線を通し、社会的無視・忘却に対する事例研究を行った。まず、この災害の概要と災害対策および被災者の動静に関する経緯を確認した。また、災害後に整備された復興住宅のうち都市開発公団や民間等から借り上げた住宅（借上復興住宅）への入居者退去を求める自治体が入居者に対して起こした裁判など近年の動向も概観した。これを踏まえ、インタビュー調査により元被災者が直面する社会的援護を要する状態と社会的援護との関係を通して、社会的無視・忘却の状況を実証した。

結論において、社会的無視・忘却について、本論が目的としたことを評価し、社会的排除および社会的援護の研究に対する貢献、および限界と今後の課題を論述した。本論によって明らかにした社会的無視・忘却は、「社会的包摂のため様々な社会的援護が提起されるが、社会的援護は包摂の目的に反しかれらを再び排除することで、包摂的排除によって社会的無視・忘却が起こるからである。また、社会的援護による「社会的無視・排除」は、ラベリング理論から説明される相互作用として同時に社会的援護の内側でも社会的無視・忘却が生じさせる。これらは、災害の被災者に対するインタビュー調査にもとづく事例研究によって、論証することができた。

また、本論が社会的排除の研究へ貢献する点として、社会的排除の個別的影響と、そのさらに進行した状況への問題性を社会的無視・忘却によって明らかにしたことがある。また社会的援護に対する貢献として、社会的援護が自己矛盾をもたらし、それ自体の社会的信頼を揺るがす状況を提示する。その問題が社会的援護に対する公共性への課題となると考える。

# Abstract

The School of Graduate Studies,  
The Open University of Japan

Name Takashi Hayashi

A study on the social neglect/neglected in the social support

The problem has become more serious as the number of people with social exclusion increases, and various social supports have been raised. Despite contrary to the purpose of social inclusion, social support also eliminates people again. Because Social support creates social neglect/neglected with backing, eliminating them as an interaction. And social neglect/neglected occur in this system and activities themselves. The aim of this study is, first, to the reviewing social exclusion and prior research on the interaction between institution and people, second, to clarify the structure and process in what social neglect/neglected are created. The findings of social neglect/neglected have made to clear that the interaction between the social exclusion and the contribution of social support, and the personality of the people and socially denies its existence by deepening of social exclusion excludes them. This updates the knowledge about social exclusion. I could demonstrate it by interviewing the disaster victims. The conclusion of this study is that social support loses confidence, thereby, and social exclusion leads to severe division.

The introduction clarified the location of the theme of this thesis that to confirm the current situation dealing with the theme and background by to raise a problem from one incident about that a son who killed at his mother committed suicide. And, taking such problems as an example, I showed that social support systems and activities are not effective and clarified the significance of this thesis. In addition, regarding social exclusion in this underflowing, I also showed that spread like a case example of the case, that of solitary death that occurred in the

middle of the city. I have sorted out the current awareness of the background of social exclusion. Next, as a viewpoint to consider this study, I confirmed the intermediate scope, focusing on the interaction between the macro and the micro viewpoint as well as the interaction between them. Next, in order to organize the concept of the theme, I conducted a prior study review on social exclusion/support. Based on the above, I showed the purpose, method, and composition of this thesis, ethical proceedings.

In Chapter 1 I discussed the concept and composition of social neglect/neglected. First of all, I showed the definition of social ignorance/oblivion, and as social disregard and forgiveness generation process, I gave social cooperation and interaction with the parties. I revealed that the people were neglected and further oblivious to the people who are in social exclusion because the circumstances where social support tried subsisting again will need support again.

In Chapter two I have focused on factors and composition of social neglect/neglected and clarified its structure. First, I analyzed social exclusion, social support and prior research of sociology, derived social ignorance and forgetting factors, and then clarified the problems of prior research. I explained that social cooperation is based on universals, on the other hand, and it has selectivity and consists of institutional and community support and civic aid activities. These complement each other's role while interacting differently with the organization separately with social exclusion and clients. In addition, both of them function both for sub-Sumption and exclusion concerning the sharing of the reality. In particular, the latter creates social ignorance/oblivion as a result of sharing denied by the diversity of the parties and social support functioning selectively. In this study, I call this an "inclusive exclusion" and used theory, such as social interaction and labeling in sociology to prove it.

In Chapter three, I made a critical examination from social neglect/neglected to social exclusion and raised a problem with the conventional knowledge of social exclusion to expand. Prior research on social exclusion has analyzed the factors, but it does not clarify the prospects and conditions that will become serious. However, I have analyzed and found that the case studies revealed that individual effects are drawn. By doing this, I showed the following prospects by using the concept of social neglect/neglected. In other words, the individual influence of social exclusion, the seriousness of social exclusion leads to the denial of existence from personality exclusion, and the social division becomes serious.

The purpose of Chapter four is to elucidate the problem of social exclusion by focusing on the interaction of social neglect/neglected through comparison with previous studies on social interaction and labeling theory. Since social support systems and activities are factors for social neglect/neglected, we do not share reality with people in social exclusion. And their system and activities also urge neglect and forgetting by labeling, and it also makes the legitimacy of own aid relative. As a result, this will hurt the trust of the parties, resulting in individual and personal elimination. At the same time, it plays a reverse function to recover from social exclusion and social inclusion. I call this a "rejection effect of aid" and clarified its structure.

In Chapter five, I demonstrated that the concept of social ignorance and oblivion based on theoretical arrangement and consideration is typically seen in victims of disasters.

In Chapter six, based on the results of Chapter five, I have I demonstrated the theory of social neglect/neglected as a result of an interview survey of the victims of the Great Hanshin-Awaji Earthquake (January 17, 1995). Of them, they experience social neglect/neglected because people are evicted from the residence in recent years and people are hiding damage in individuals. For that reason, I also explained the recent events.

As a conclusion of this study, I discussed the contribution to social excluding and social support research, limitations and future tasks after evaluating discussions about social neglect/neglected. The relationship between social exclusion and social neglect/neglected, I revealed in this research raises the problem of social inequality placed by the people in social exclusion and is a knowledge that is utilized to them. And regarding social support for social neglect/neglected, I concluded as follows, with the exception of the case of the man who committed suicide that I introduced first. In other words, social support cannot sufficiently enclose the side in social exclusion, and it will become a system that they do not expect. I also arranged that this research could show some knowledge that contributed to research on social exclusion and social support. On the other hand, the limit of this research is that I have constrained by my own values and did not adopt the theory and knowledge leading to the denial of human existence.

# 博士論文審査及び試験の結果の要旨

## 学位申請者

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻社会経営科学プログラム

氏名 林 隆司

## 論文題目

社会的無視・忘却における要援護性に関する研究

## 審査委員氏名

- ・主査 放送大学教授 博士（人間科学） 坂井 素思
- ・副査 放送大学特任教授 修士（社会学） 森岡 清志
- ・副査 放送大学准教授 博士（社会学） 北川 由紀彦
- ・副査 横浜市立大学教授 修士（商学） 影山 摩子弥

## 論文審査及び試験の結果

本論文は、「社会的無視・忘却」という、社会的相互作用の過程として生ずる現象が現実の社会の中に起きることを指摘し、この「社会的無視・忘却」という現象がなぜ生ずるのかについて追究した論考である。

序章において、「社会的無視・忘却」現象の現状認識と社会背景を概観している。「介護殺人のあと命を自ら断った男性の事件」と、「ミイラ化したホームレス男性の遺体が発見された事件」を例に取り、「社会的無視・忘却」現象の広がりを見せ、これを提示している。とりわけ、これらの男性介護者の社会的孤立や介護殺人・未遂事件が現代社会で生じ、この中で社会的援護の制度と活動に限界のあることを明示した。この底流には「社会的無視」現象が関わっていることを問題提起している。

第1章において、なぜ「社会的無視」現象が生ずるのかについての原因を明らかにする予備的考察を行なっている。この現象の背景を考察するため、厚生省の研究会報告書を批判的に検討しており、この中で、社会的無視の生成過程を構成する個別的要因、社会的要因、社会的援護の種類などを整理している。



これらを通じて、社会的無視・忘却の概念と構成を明らかにしている。社会的無視・忘却とは、社会的な排除とラベリング的な逸脱の生成される過程の中で、「無視される側」と「無視する側」との間の社会的相互作用であることを概念化して述べている。第1の「社会的排除」の局面では、第1次的な社会的排除に遭った人びとに対し、社会的援護の制度や活動が一度社会的包摂として行われることになるが、再び要援護状態に陥る状況が繰り返されることで、第2次的な社会的排除が生じ、そこでは当事者が無視され、さらに忘却される可能性が生ずると考えている。また、第2のラベリング的な逸脱の生ずる局面では、「無視される側」から見て、この過程は、社会的援護の活動にも同時に分断を生み、「無視する側」を生み出す可能性を指摘している。

第2章において、先行研究を分析し、この「社会的無視・忘却」論の方法を導き出している。第1の方法は、先行研究で見られる、社会的援護論の限界を示している点である。社会的援護の多くは普遍主義にもとづくために、かえって選別性を持ち、制度的・共同体的・市民的援護の限界を見せる場合が生ずる。これらは相互に役割を補完し競合することで、包摂的機能ばかりでなく、排除的機能も含む可能性を持つ。とくに社会的援護が選別的に機能する場合には、社会的無視・忘却を生み出すことになる。

第2の方法は、「社会的無視・忘却」現象の二次的性格が現れている点である。社会的無視は、不慮の災害・事故・犯罪などの被害によって生ずる直接的な影響ではなく、これらの被害ののちに、社会の中で間接的あるいは二次的に生ずる「無視される側」と「無視する側」との間に起きる社会的相互作用である。したがって、社会的無視現象は「無視される側」においてのみ生ずるだけでなく、同時に「無視する側」においても生ずる現象であるという特色を持っている。

第3章と第4章で、社会的無視が生ずるプロセスには、二つの局面のあることを指摘している。ひとつは「無視される側」が生成される局面であり、第3章で社会的排除論から洗練された論理が使用され、このことが説明されている。この局面では、(1) 自然災害などを受けた人びとが、社会的排除の危険に晒されて、(2) 社会的援護によって一度は包摂されるのであるが、(3) その後二次的な社会的排除を受ける可能性があり、そのことが社会的無視を発生させている。この(1)から(3)に至る、社会的無視論の論理を社会的排除論の批判的検討から導き出している。多くの社会的排除論が二次的排除の生ずることについては等閑視している。けれども、岩田正美によるケース・スタディなどの個別的な影響が素描されている議論を参考としながら、社会的包摂の限界を指摘し、社会的排除の深刻化した状況として、二次的な排除に至ることを示唆した。これらの社会的排除への批判的検討を通して、従来の社会的排除研究に対して拡張すべき点の存在することを、本章では問題提起している。

第4章では、第3章と並んで、社会的無視が生ずるプロセスのもうひとつの局面として、「無視する側」が生成されるプロセスを描いている。ここで注目すべき点は、社会的排除を受けた「無視される側」から見れば、自分を無視する当のルールを形成した「無視する側」においてこそ、社会的無視が形成されているのを

見ることができるということである。つまり、自分を無視する集団と、無視しない集団とが、分離して見えることになる。この社会学者H・ベッカーによる、いわゆるラベリング的逸脱の作用によって、「無視する側」についても、社会的無視が生成されることを指摘している。この局面を指摘することによって、ラベリング理論に関する先行研究の比較検討を通して、「無視する側」を分析する視点を拓いたといえる。

以上からわかるように、社会的無視は「無視される側」において、二次的な社会的排除によって生ずると同時に、「無視する側」において、当の包摂ルールというラベルを形成した者の間で生成されることになる。すなわち、「無視される側」の社会的無視と、「無視する側」の社会的無視の二重構造によって、社会的無視の社会過程が形成されていることを指摘できる。

さらに事例研究から付け加えるならば、短期的に見れば、なぜ社会的無視が生ずるかについては、制度的・共同体的・市民的援護の公式的な限界の結果生ずるといえるのであるが、そればかりではない。長期的に見れば、人びとの示す社会的無視が常態化したり傍観者的になったりする時間効果にも原因を見いだすことが可能である。本論においては、このような時間の効果による社会的無視の作用を、「社会的忘却」と呼んでいる。

第5章と第6章では、阪神・淡路大震災で被災した住民へのインタビュー調査からの社会的無視・忘却に関する事例研究を行っている。まず、第1局面として、「無視される側」の住民の社会的排除の過程を描いている。ここでは、災害後に整備された復興住宅への入居者を取り上げている。この過程では、(1)被災によって第1次的排除を受けた住民が(2)復興住宅を供給されることによって社会への包摂を受ける。けれども、この復興住宅のうち都市開発公団や民間から借り上げた住宅(借上復興住宅)への入居者の退去を求める自治体が現れており、(3)第2次的排除の対象となっている。ここに(1)から(3)に至る「無視される側」における社会的無視が生じていることが確認できた。

そして、さらに第2局面として、「無視する側」としての住宅供給者の動向も観察した。そこでは、入居者に対して起こした裁判などの近年の動向を通じて、住宅供給者の中でも包摂的施策を考慮する住宅供給者と、退去を求める住宅供給者とが、公共団体の示すルールの違いによって分かれてくることが観察できた。

以上から、本論文の結論が導き出される。なぜ社会的無視が生ずるのかといえれば、第1に二次的な社会的排除によって、「無視される側」が生成されるからであり、第2にラベリング的逸脱の作用によって、「無視する側」が生ずるからであるといえる。すなわち、社会的無視現象は、これら「無視される側」と「無視する側」の複合的な理由によって生成され、この社会的無視特有の社会的相互作用過程を明らかにしたことが、本論文の特色となっている。

本論文の主題は、「社会的無視・忘却における要援護性に関する研究」であるが、これは近年不可視な状況の中で増加している特別な要援護者を正面に据えた社会的意義をもつテーマであるといえる。社会的排除の中でも、とくに多くの社会福祉研究者たちに見過ごされてきた二次的影響に注目している特徴が見ら

れる。この論文は、極めて特殊ではあるが普遍性をもつ排除現象を研究の俎上に乗せた点で、社会に評価されるべき点を十分に含んでいる。

さらに、これ以外にも評価されるべき点が3点ある。第1に、本論文の採用した、複合性を強調した方法論は注目に値するであろう。先行研究として取り上げた、社会的排除論と逸脱行動に関するラベリング理論を批判的に検討して、両者の特色を生かし、複合させた理論を展開している。この論理の複合的な表現方法は十分に評価できる。第2に、社会的包摂を目的とする試みが逆に二次的な社会的排除を生じさせるという現象が存在することを明確に示したことも評価される。さらに第3に、事例研究を駆使して、社会的排除論やラベリング理論の中でも、社会的無視という特殊性に注目した考え方を取り上げたことで、ユニークな議論を立てることが可能となった点が評価される。

もともと、「社会的無視」あるいは「社会的忘却」という概念は、心理学や人文科学において散見されるものの、社会科学の概念としては、まだ定着をみないものであり、口頭試問においても審査員からいくつかの疑義が呈された。したがって、本論文で事例を多く取り上げてはいるものの、この概念が最終的な社会的認知を受けるまでには、概念のより一層の洗練を行うことなど、数多くの課題が残されているといえよう。また、口頭試問ではこの他にも用語や文体での生硬さが目立つ点などが指摘されたが、これも新しい概念の構築に挑戦しているからであると考えられる。しかしながら、著者の林隆司氏はこれらの難点に対しても、今後の研究生活の中で解決し、この議論をさらに発展させていくことを審査委員たちは信じている。

以上、論文全体を公平に判断して、本論文が放送大学大学院の博士論文として評価を受けるに十分に値する内容であることを、本審査委員全員が認めるものである。

以上